

スポーツジムなどニーズ高まるタオルの個包装 全自動包装機で高付加価値を提供

包装機器メーカーの(株)日本シーリング（埼玉県さいたま市）では、リネンサプライ向けの全自動包装機 SS シリーズを開発。タオルやユニフォーム、ダイアパー、おしぼりといった各種リネン品を包装して衛生を確保したい、あるいは包装作業を自動化したいというニーズの高まりから採用が始まっている。

今回は、コロナ禍の客先の要望に応え、手動包装機で個包装を始めたものの需要増で生産が追いつかず、全自動包装機導入に至った神奈川県(有)谷川（横浜市）を訪れ、屋嘉部豊代表取締役社長に話を伺った。

おしぼりレンタルから事業を多角化

(有)谷川は、昭和 30 年の創業。横浜市内を中心として飲食店等に布おしぼりのレンタル事業を展開して成長。その後は事業の幅を拡げ、ドライタオル事業部（理美容等レンタルタオル）、業務用資材事業部（外食関連資材販売）、ダスコン事業部（レンタルマット・モップ）、業務用印刷事業部（名入れ資材販売）、クリーニング事業部（ユニフォームクリーニング）、清掃事業部（エアコンクリーニング・店舗清掃・害虫駆除）などを行っている。

事業の中心だったおしぼりの需要は、外食離れ、紙おしぼりへの移行などの影響により 10 年ほど前から減少傾向となり、さらに昨年からの新型コロナによる営業自粛により、おしぼりの受注も大幅に減少したという。



屋嘉部 豊社長

屋嘉部社長は、「このコロナに限っては、自分たちの営業努力で何とかなるものではなかった。おしぼりしかなかったら経営は大変だった」と語る。



▲今年9月に稼働を始めた全自動包装機SS1001。客先の要望に応え、スポーツジムのタオルやユニフォームを個包装する

その中でも、15 年ほど前から始めたレンタルタオルが需要を伸ばしている。最初は、タオルフォルダー 1 台のみ、作業担当も 1～2 名でスタートしたというが、「5～6 年前あたりから急に量が増えてきて、コロナ禍ではおしぼりの生産を上回っている。客先は理美容や介護施設など小ロットの物を自社で直接受けているほか、元請けから入る仕事も年々増加している」という。



▲昭和30年創業以来、おしぼりで成長してきた谷川の工場



▲限られたスペースにレイアウトを工夫して設置

コロナ禍でタオル個包装の要望増える

タオルの生産量増加により、3年前にはおしぼりがメインだった工場のレイアウトを変更してタオルエリアを拡張。タオルフォルダーを5台に増やしたほか、1階の乾燥機から3階に自動搬送するエアシューターも導入して増産体制に入った。

タオルは、コロナの影響もなく増えているが、客先の要望に変化があったという。個包装というニーズだ。「今まで、タオルを包装してほしいという要望はまったくなかった。仮にあったとしても、こちらが受けなかったと思う」(屋嘉部社長)。

しかし、スポーツジムがタオルを貸し出す際、今までは裸で手渡ししていたが、コロナ禍で“誰かが触ったタオルを使うのは…”という状況となり、「単価がかかってもいいから1枚ずつ包装してほしい」という要望があったという。以前はフィルムがゴミになることもあり不要とされていた包装だが、コロナ対策徹底により営業存続を図る客先の要望に応えるカタチで昨年、タオルを個包装することになったという。

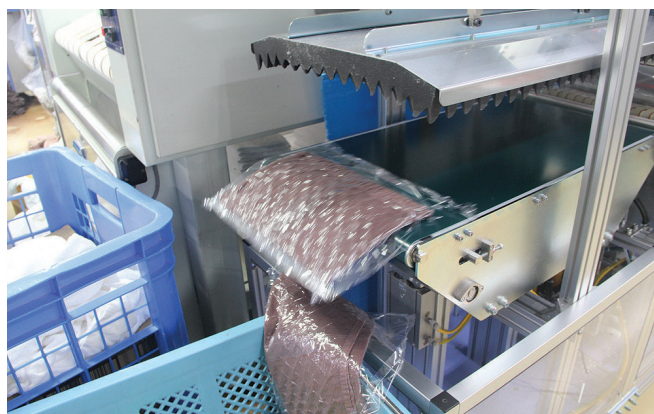
当初は、ユニフォームやワイシャツをパックする既存の手動包装機を使ってタオルも包装。しかし、1人がタオルをフィルムに入れ、反対側からもう一人が引いて



▲手間がかかっていた手動包装機から自動化



◀フェイスタオルの個包装。投入コンベアにタオルをセットすると、自動でフィルムに入り、上からタオルをプレスして中の空気を抜き下、シール・カットされる



パックするという2人作業は手間がかかり、量をこなすのは難しかったという。

そんな時に、日本シーリングの全自動包装機の提案があった。「確かに作業はラクになるが、客先1件、2件のためにこれだけの機械を入れても採算がとれない」と保留したが、その後も個包装の要望がさらに増えていったことから、導入を決めた。

脱気して自動包装、荷崩れしない

今年9月に稼働を始めた全自動包装機は、SSシリーズではコンパクトなSS-001(長さ2,110×幅680×高さ1700mm)。

投入コンベアに商品をセットするだけで袋詰め・脱気・シール・カットを自動で行う機械で、たたんだタオルやユニフォームをコンベアに置くとフィルムに入り、上からのプレスにより空気を抜いた状態でシール、カットされる。万一、品物がずれてシール時に挟んでもセンサーで検知しており、切ってしまうことはない。処理能力は、時間800枚。

包装により、外気や人の手に触れることなく異物混入も防ぎ、より衛生的なりネンを提供することができる。



◀タオルを包装した仕上がり。結束せずにリネン袋に入れて納品する

▼ネットカフェのブランケット。脱気しているのでコンパクトな状態で納品できる



◀ユニフォーム（コックコート）の個包装。使用するまで手に触れない包装は、異物混入も防ぎ衛生向上に貢献する

また、「脱気機能」が高い評価を得ており、積み重ねても搬送時に荷崩れしないのがポイント。同社では、包装したタオルは結束せずにリネン袋に入れて納品しているが、脱気によりコンパクトになって搬送がラクになったという。

フィルムの交換部はスライド式で、二つ折りで軽量化した440mm幅のフィルムの採用により、女性でも交換作業が容易となっている。

生産性が大幅に向上、約1時間で完了

同社の個包装サービスは、スポーツジムのタオルやユニフォームのほか、ネットカフェのブランケットなど着々と点数を伸ばしているが、手動の包装機の頃は時間200枚が限界で、「時間のムダとは言わないが、手動の作業は包装自体よりフィルムを巻き上げるのに時間がかかり効率が悪くてやり切れないし、いくら別料金をもらっても合わなかった」と語る。

2人が担当して午後はすべて包装作業という状態だった現場に全自動包装機が入ったことで、作業労力が大幅に軽減された上に、作業はわずか1時間ほどで完了する



▲タオル需要の増加に合わせてフォルダーは5台に増設

ことになった。

また、包装工程の生産性アップは、工場全体に効果が出ているという。

「今までは包装に時間がかかるので、洗いの順番を考慮していた。個包装の品物が一度に仕上げ場に入っても処理できないし、品物の山で作業スペースもなくなるので分散して洗っていたが、今はまとめて洗って一気に終わらすことができるので、全体的にかなり効率が良くなった」（屋嘉部社長）。

コロナ対策の補助金を活用して導入

今回の導入にあたっては、補助金を活用できたことも決め手になったようだ。神奈川県「小規模企業感染症対策事業補助金」、いわゆるコロナ対策の補助金で、リネン品を使用するまで人の手に触れないようにする個包装のための設備導入が補助金対象として認められた。

補助金割合は4分の3であり、自己資金は機械代金の4分の1で済んだのは大きい。

「スポーツジムを中心に、個包装を求める店が増えている。コロナ対策として一度包装してしまうと、おそらく元には戻せなくなるから、包装サービスはまだ増えていく」とする屋嘉部社長。

今後については、「本当はシンプルな仕事のほうがいいが、包装はサービスの価値を高め、お客様の要望にも応えられる。これまで量が多い客先は包装を断っていたところもあったが、包装の生産性が上がったことで今後は積極的に提案してこの機械をもっと活かしたいし、当社だからできるサービスで高単価の仕事を獲得していきたい」と語った。

※製品に関する問合せやショールーム見学や商品テストの申込みは、TEL048-758-4422 まで。ホームページでは、デモ運転動画も公開中。<https://nihon-sealing.com>